The Japan Society of Educational Sociology

「学校改革」を引き起こす教師の逸脱

—保守的・閉鎖的な教師集団との関連から—

原田拓馬（山口大学大学院）

1．問題の所在

これまで，「学校改革」を引き起こす教師の存在は，第1に教師集団の保守性・閉鎖性を指摘してきた教師文化研究の文脈，第2に教師文化研究を背景とした学校組織における革新的実践の普及を描いた事例研究の文脈という2つの方向からアプローチされてきた。しかし，「学校改革」を引き起こす教師個人（＝当事者）の視点は，しばしば教師集団に埋没してしまうか，クローズアップされた場合も，教師集団への親和的な語りやイメージに注目が寄せられ，「学校改革」を主導するという一面的理解へと回収されている。

「学校改革」を引き起こす教師の視点を踏まえるならば，保守的・閉鎖的な教師集団との相互作用のなかで，「関係している集団の価値が拒否されるばかりではなく，個人の自分自身の価値がその代わりに採用されるかぎりで，挑戦は価値逸脱」（Shoham＆Rahav 訳書 1998, 229 頁）であるとする論点は重要といえよう。にもかかわらず，「学校改革」を引き起こす教師個人の視点から，「学校改革」過程において慣習的な教師集団に起因する負の影響＝困難を把握しようとした実証的研究は前例にない。それゆえ，彼らがその困難を乗り越える方途も示されていないのが，研究の現状である。以上の問題意識をもち，本報告では，「学校改革」を引き起こす教師個人（＝当事者）の視点から，「学校改革」過程において保守的・閉鎖的な教師集団との相互作用過程において生起する困難と，その乗り越えに関する実態を明らかにしていきたい。

2．分析の枠組み

本報告では，第1に，スティグマ（stigma）概念の観点から，保守的・閉鎖的な慣習的教師集団との相互作用過程に生じる負の影響＝困難の実態を分析したい。「学校改革」を引き起こす教師に焦点化すると，教師集団への「挑戦は価値逸脱」であり，「挑戦者にたいする烙印の効果は，同調に賛成するようにと価値の逸脱を放棄させること」（Shoham＆Rahav 同上，230 頁）であるため，彼らの困難にはスティグマの介在が問題化される。したがって，まずはスティグマタイゼーションの発生と認識を把握し，それに対する振る舞いの展開を分析する。

第2に，本報告では，「学校改革」を引き起こす教師のもつスティグマがカリスマ（charisma）へ転換（カリスマ化）する実態を分析したい。大村（1979）によると，スティグマは負の方向への逸脱，カリスマは正の方向への逸脱を意味し，「悪魔との交渉を刻印するマークが，まさにそれ故に，神との交渉を刻印するマークに意味転換」（118 頁）する可能性が指摘されている。すなわち，「学校改革」を引き起こす教師のスティグマとされうる挑戦的志向がカリスマへと転換する可能性が考えられる。スティグマからカリスマへの転換を捉える理論的枠組みとして，リップ（Lipp 1977）の「三極的思考モデル tri-polar thought-model」を参考にする。

なお，本報告では，「学校改革」を引き起こす教師のキャリア（career）に着目し，これら2つの分析課題を検討したい。

3．調査概要

本報告の問題に取り組むために，「学校改革」を引き起こした経験をもつ教師（小・中・高校教師）に対し，半構造化形式で面接調査を実施し，生活史を収集した。本報告では，調査協力者の秘匿性保持とデータの厳密性確保の両立を意図し，学校の公式窓口を使用せず，学校外の教師サークル等にて私的に調査協力を募ることにした。それゆえ校種も幅広いが，傍から見れば何ら共通点をもたない彼らが

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

「学校改革」を引き起こす教師として類似したキャリアを歩む過程を検討することは，本報告の趣旨と適合的といえる。

4．スティグマ化

「学校改革」を引き起こす教師は，親密性の高いインフォーマル集団へと参入し，その集団の志向が「学校改革」を目指した場合，改革案策定の実践，「学校改革」の具体的手法の学習，メンバーを「俺たち」，それ以外を「普通の先生」と位置づける境界設定を伴った視角形成を達成していく。しかし，彼らの動向が知れるや否や，「空気のように流され」たり，直接的に「潰され」たりを経験する。「学校改革」を引き起こす教師の挑戦的志向はその発覚を以てスティグマと化し，「学校改革」と全く関係ない学級経営や生徒指導での同僚教師間連携の場面でさえ，劣位と排除の強制を受ける。つまり，「学校改革」を引き起こす教師には，慣習的集団の維持する秩序への挑戦者という社会的イメージがラベリングされ，慣習的集団の秩序維持を目指したスティグマタイゼーションが働きかけられる。

しかし，彼らはスティグマタイゼーションによって劣位と排除を余儀なくされるなか，それをどうにか出来るわけもないこと，その場をなんとかやりすごすしかないことを理解すると，スティグマに起因するダメージを軽減しようと，緊張処理や情報操作（Goffman 訳書 2001）を主体的に構築・実践している。たとえば，緊張処理として，徹底して「頭を下げ」続けて慣習的集団の溜飲を下げさせ，慣習的集団の多忙感を増さないようにインフォーマル集団外の助けを求めず，孤軍奮闘するすがたを呈示するなどし，集団間の優劣関係を保ち，慣習的集団の秩序を傷つけないことをアピールする。しかし，慣習的集団のなかには，「学校改革」の主体者や動向自体を知らない教師も少なくない。彼らはそこからのスティグマタイゼーションを回避すべく，情報操作を試みる。校長をインフォーマル集団に取り込み，その指揮体制下に隠れるカムフラージュを試みることはその常套手段である。

スティグマ自体が軽減する契機は，数年間に及ぶ対処方略を通じて達成にいたる「学校改革」の成功である。ようやく成功を収めた「学校改革」が，慣習的集団の秩序に挑戦せず，それを脅かさないことが証明されると，スティグマタイゼーションの正当性は揺らぎ，「学校改革」を引き起こす教師へのスティグマは軽減していく。以上のプロセスの背景をなすのが，カリスマ化である。

5．スティグマからカリスマへの転換

「学校改革」を引き起こす教師において，スティグマからカリスマへの転換を達成し，「学校改革」を成功に導くなかで，セルフ・スティグマタイゼーションがその契機となっている。「学校改革」の正当性とスティグマの不当性を主張し続けながら，スティグマの生じているその状況が自然と好転すると信じている限り，緊張処理や情報操作のフェーズに移行することはない。しかし，それではスティグマに対処できず，「学校改革」の成功は一向に訪れない。

しかし，セルフ・スティグマタイゼーションを経て，「学校改革」を引き起こす教師が自身へのスティグマタイゼーションに腹を括ることによって，「レイベリングが依拠する価値＝規範のトータルな再構成を企図」（小松 1981）し，スティグマ・ダメージの軽減，延いては「学校改革」の成功に向けて戦略的な舵取りを始める。彼らはスティグマを受け容れ，波風を立てず，挑戦のポーズを取らず，周囲の教師を巻き込まない抑制的姿勢を取り続けることで，「学校改革」の成功を手にし，カリスマへと転じていくのである。

文献

Goffman, Erving., 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Simon & Schuste, Inc（＝2001，石黒毅訳『スティグマの社会学――烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房）.

小松秀雄，1981，「世界構成の弁証法としてのカリスマ化――カリスマ論の再検討」『ソシオロジ』26(2)，61 - 80 頁。

Lipp,Wolfgang. , 1977 , Charisma: Social Deviation, Leadership and Cultural Change, *The Annual Review of the Social Science of Religion*, Vol. I , pp.59 - 77.

大村英昭，1979，「スティグマとカリスマ――『異端の社会学』を考えるために」『現代社会学』12，117 - 144 頁。

Shoham, Giora S.＆Rahav, Giora., 1982, *The Mark of Cain*, University of Queensland Press（＝1998，藤田弘人・神戸博一訳『犯罪と逸脱のスティグマ（烙印）理論――カインから現代まで』文化書房博文社）.

NII-Electronic Library Service